板碑原石の伝播過程研究試論

——三多摩を対象として——

小野寺　淳

はじめに

板碑とは，中世の供養塔の一つである。地理学では，中世村落の分布を知るうえで，板碑が史料となりうるという矢嶋仁吉の次の指摘がよく知られていよう。

「板碑発見地の分布は，本地域の自然発生的集落の所在地に多いのである。勿論，板碑の発見地が当時の集落の所在地であると速断するのは妥当ではないが，板碑は少なくと，当時の居住地域，あるいはその近辺に建立されたものであろうと思われる。[1]」

この引用文は，昭和29年(1954)に発行された『武蔵野の集落』の中の一文である。以後，歴史地理学の研究では，板碑を利用することもなかったように思う。

しかし，近年，板碑の所在確認調査が行政区域単位で急速に進められており，従来その史料的価値を充分認められながら，質的な史料にとどまっていた板碑は，ようやく量的な考察も可能な史料となってきている。

I　研究目的と対象地域の設定

筆者は，北上川の河川交通を研究する過程で，その輸送物資の中に意外に石材が多いことに気づいた。この石材は，石巻市稲井で産出される粘板岩で，明治期の統計書によれば，盛岡まで移入されていた。聞き取りによると，川を溯る船は空荷であると船足が遅いため，稲井石を船底に積んでいたという。[2]注意してみると北上川，流域には，下水の蓋・石垣・敷石・墓石等に稲井石が利用されているのに気づく。そればかりでなく，稲井石は板碑にも利用されていた。

「陸前地方の板碑は主として仙台平野にはびこり，登米・桃生・牡鹿の諸郡が中心をなしてゐるように思はれる。形式は概して粗野で，材料の撰択また自由である，殊に面白い事は牡鹿郡を中心に稲井石と称する粘板岩質の石材を用ひた薄手のものが発達し，その餘波は岩代の伊達・信夫両郡地方にも及んで居る。[3]」

このように，稲井石は中世から，すでに利用されていたことがわかる。否，中世以前から利用されていたかもしれない。日本は木の文化といわれ，河川輸送においても木材の比重は高いが，石材もまたかなりの比重を占めていたのではなかろうか。こうした問題意識から，石材の伝播過程を板碑によって考察することを，本研究の目的としている。

三多摩を対象地域とした理由は，次の３点である。第１点は，稲井石製板碑の所在確認がまだなされていないのとは対照的に，精緻な所在確認調査がなされているためである。第２点は，三多摩の板碑が，後述する伊奈石製板碑を除くと，すべて荒川上流の秩父で産出される緑泥片岩を石材としており，産地が限定されているということ。第３点は，板碑に関する研究は，武蔵型板碑に関するものが最も進んでいるためである。以上の理由によって，秩父で産出された緑泥片岩製板碑（通常，武蔵型板碑と呼ばれる）が，三多摩地域にどのように伝播していくかを事例として考察していく。

II　研究方法

表1　集計年代別板碑数（市町村別）

	採用板碑数							総基数	採用率（%）
	1251年—1300年	1301年—1350年	1351年—1400年	1401年—1450年	1451年—1500年	1501年—1550年	計		
青梅市	13	69	151	116	63	13	425	1,124	38
奥多摩町	1	8	11	20	17		57	218	26
桧原村		16	19	7	3		45	109	41
五日市町	1	21	17	33	3		75	209	36
日の出町	6	11	26	35	19	1	98	207	47
秋川市	1	13	25	20	11	4	74	140	53
羽村町			5	2	3	1	11	41	27
瑞穂町	1	8	4	6	8	1	28	79	35
福生市		3	14	10	12	1	40	66	61
八王子市	5	27	76	40	35	2	185	411	45
日野市	4	28	36	36	26	1	131	335	39
町田市	3	64	116	65	46	2	296	636	47
多摩市	2	50	51	37	20		160	361	44
稲城市	2	16	16	11	5	2	52	125	42
昭島市			4	5	5		14	36	39
立川市	6	53	1	2	2		64	86	74
武蔵村山市	3	2	19	4	7	1	36	68	53
東大和市		6	24	21	8	4	63	99	64
東村山市	1	45	82	29	15	1	173	374	46
国立市	1	6	18	7	3		35	52	67
国分寺市	1	13	15	12	6	1	48	68	71
小金井市		12	33	4	8		57	139	41
府中市	4	19	43	32	27	3	128	268	48
清瀬市	3	1	3	3	3		13	32	41
東久留米市		4	13	4	10	13	44	105	42
保谷市		1		2	5		8	9	89
小平市			1				1	6	17
田無市		1					1	10	10
武蔵野市	1	10	4	1	5		21	22	95
三鷹市		7	9	4	4		24	24	100
調布市	1	8	15	11	7	5	47	234	20
狛江市	2	4	13	7	8		34	54	63
計	62	526	864	586	394	56	2,488	5,847	43

武蔵型板碑の総基数は3万基以上といわれ，うち三多摩では5,847基にのぼる。[4] しかし，本研究の目的では，そのうち年号ならびに原所在地が明確な板碑を選び出し，データとしなければならない。基本史料として，東京都板碑調査団（千々和実団長）による『東京都板碑所在目録（多摩分）』[5] を利用し，合わせて各市町村発行の文化財報告書等[6] をも参照した。これらの史料をもとに，筆者は表1のごとく，総計2,488基をデータとして採用した。その際，データとして採用できなかったもの，またその理由を次にあげておく。

(1)年号の不明なもの——破損等によって年号が不明なものを除くほか，元号2文字のうち1文字不明で，調査者が疑問符を付しているものも除いた。ま

た元号のみで年号不明のものは，その元号の中間年を造立の年と設定し，データに加えた。

(2)所在地が不明なもの——郷土館等で収集の板碑は，原所在地が明確なものだけを採用した。[7] また『東京都板碑所在目録(多摩分)』では，原所在地名が簡略記載の例があり，原所在地がどうしても見い出せない場合は除外した。

(3)伊奈石製板碑——伊奈石は，五日市町伊奈で産出される砂岩である。伊奈石製板碑の分布は，五日市を中心に，秋川流域から八王子方面に及ぶが，その数は47基を数えるにすぎない。[8] 本研究では，秩父で産出される緑泥片岩製板碑の伝播過程を追求する目的のため，伊奈石製板碑は除外した。

以上の除外項目によって除外した板碑数は，総基数の57%に及ぶが，その大半は年代不明の板碑である。表1のように，データとして採用した板碑数は，総基数の43%となるが，各市町村別にみれば40～60%台の採用率を占める市町村が多い。極端に採用率が高いかあるいは低い市町村は，調布市[9]を例外とすると，板碑数の少ない市町村であり，全体的傾向は読み取れると判断した。

こうして採用した板碑を50年単位で集計し，板碑の造立年代の地域間における若干の差に注目して，板碑原石の伝播過程を示したのが，図1から図6までの分布図である。集計単位を50年としたのは，板碑が7回忌・13回忌に造立されていた場合[10]があり，13年以下の単位では意味がなく，また人間の生存年齢を考慮すれば，集計単位を50年とするのが適当と判断したためである。具体的な分布地点は，5万分の1の地形図をベースにして，原則として大字単位で図示した。また，地点を明確に示すため，その地点における50年間の板碑数を棒線で図示した。

Ⅲ　本研究と板碑研究史

分布図の考察にはいる前に，ここで分布図の理解を容易にするため，板碑について若干の説明を加えておきたい。

まず第1は，板碑には何が刻まれているかという点である。もちろん各々の板碑によって異なるが，板碑には紀年銘・法名・造立趣旨のいずれかが必ず刻まれている。[11] その他，よく梵字で示される主尊や，板碑の下方に配される花瓶を刻むものも多い。特に，本考察のように紀年銘を必要とする場合，紀年銘が不明であっても，花瓶があればその形態を比較することによって，年代を推定することも可能となっている。[12]

第2に，いかなる信仰によって板碑が造立されたかという点である。この点は，板碑の起源論として様々な説があり，まだ定説がないといわれている。しかし，鎌倉期の板碑については浄土教，阿弥陀信仰のものが多く，また密教的色彩も濃いという。また，東国においては，板碑造立の最盛期は南北朝期であり，板碑造立の趣旨も1390年から1440年を移行期として変化がみられ，それは仏教的意味による供養塔から，講による民間信仰的板碑または「墓碑」への転化であるという。[13]

第3は，こうした板碑造立趣旨の変化による造立者側の変化についての問題である。初期の板碑ほど大きく，在地領主層によって造立されたことは，周知の通りと思う。しかし，後期の民間信仰的板碑の造立主体者は，農民であった。[14] このような主体者による板碑の分類が可能ならば，より分布図が生きてこよう。

最後に，全国的規模での板碑の伝播について触れておきたい。定説とはなっていないようだが，武蔵国荒川中流域を発生地とした千々和実の一元的発生説が，説得力を持っているように思う。千々和実は，理由として次の3点をあげている。[15] 第1点は，武蔵型板碑の一つの特徴である頂部に横二条線の様式が，他の地域での古い板碑にのみ見られること。第2点は，武蔵の初発期板碑よりも，他地域の板碑は遅れて発生していること。第3点は，荒川流域の武者が

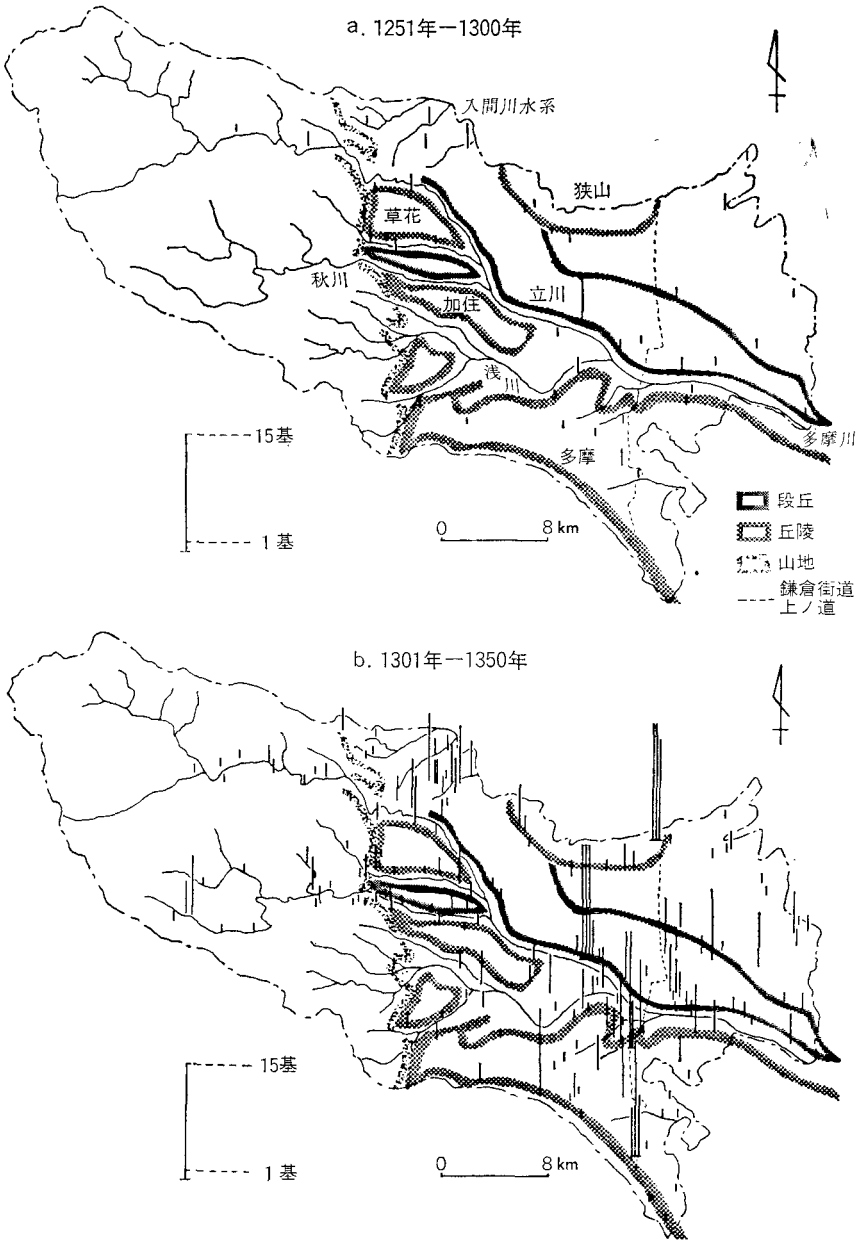

図1 a, b　三多摩における板碑分布

守護職，地頭職として赴任し，赴任先においても造立したであろうこと。

以上，4点にわたり板碑研究の現段階を，筆者の研究目的のもとに整理した。

Ⅳ　分布図による考察

まず，年代順に考察を加える。

・図1 a　(1251年—1300年)

三多摩における最古の板碑は，府中市芝間所在の

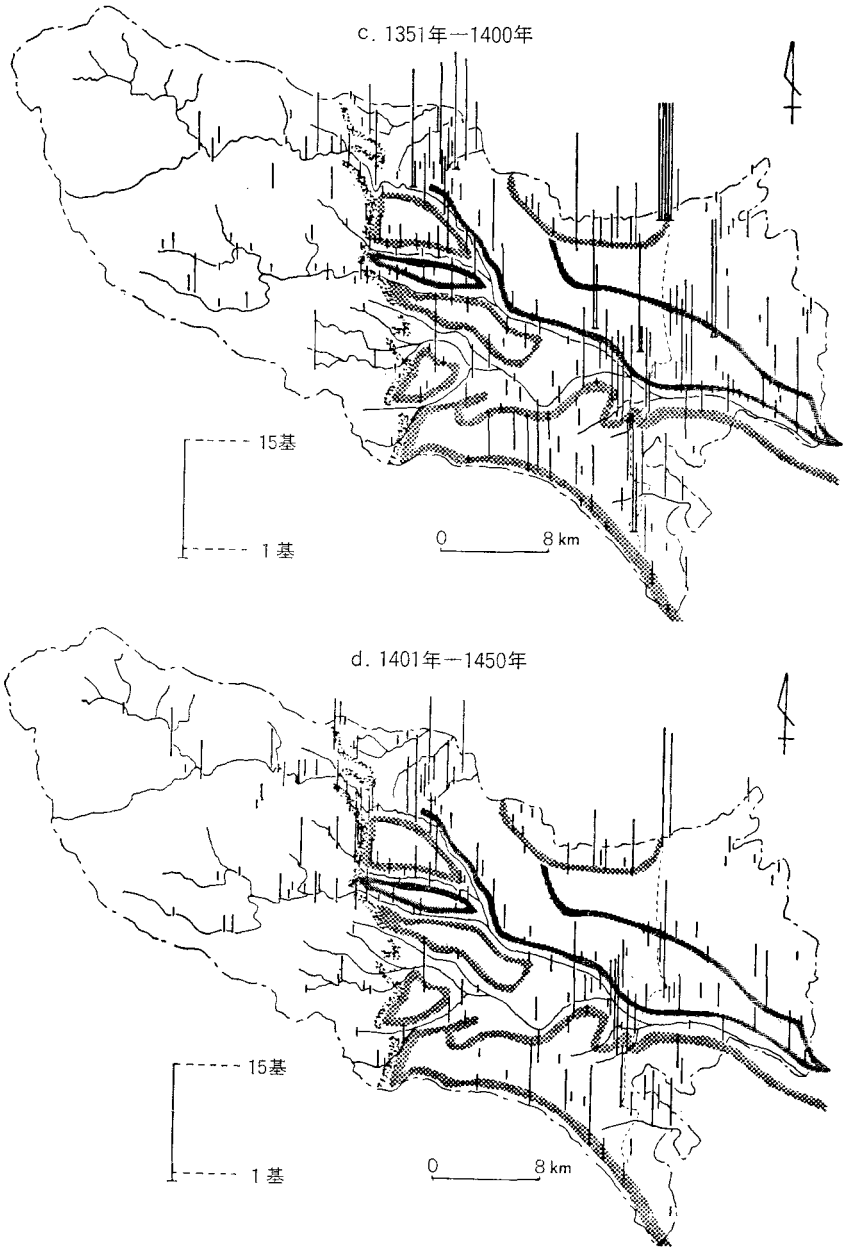

図1c，d　三多摩における板碑分布

康元元年（1256）の板碑である。現在武蔵型板碑において最も古いとされている板碑は，荒川中流域の埼玉県大里郡江南村所在の嘉禄3年（1227）の板碑であるから，29年遅れて造立された。しかし，1300年までには，年号ならびに所在地の明確な板碑は62基数えるにすぎない（表1）。

この時期では，概ね二つの地域に分類できよう。一つは，青梅市に含まれる入間川水系の上流部と，草花丘陵の麓を中心とする地域である。もう一つは，立川市・府中市・多摩市を中心とする多摩川中流部

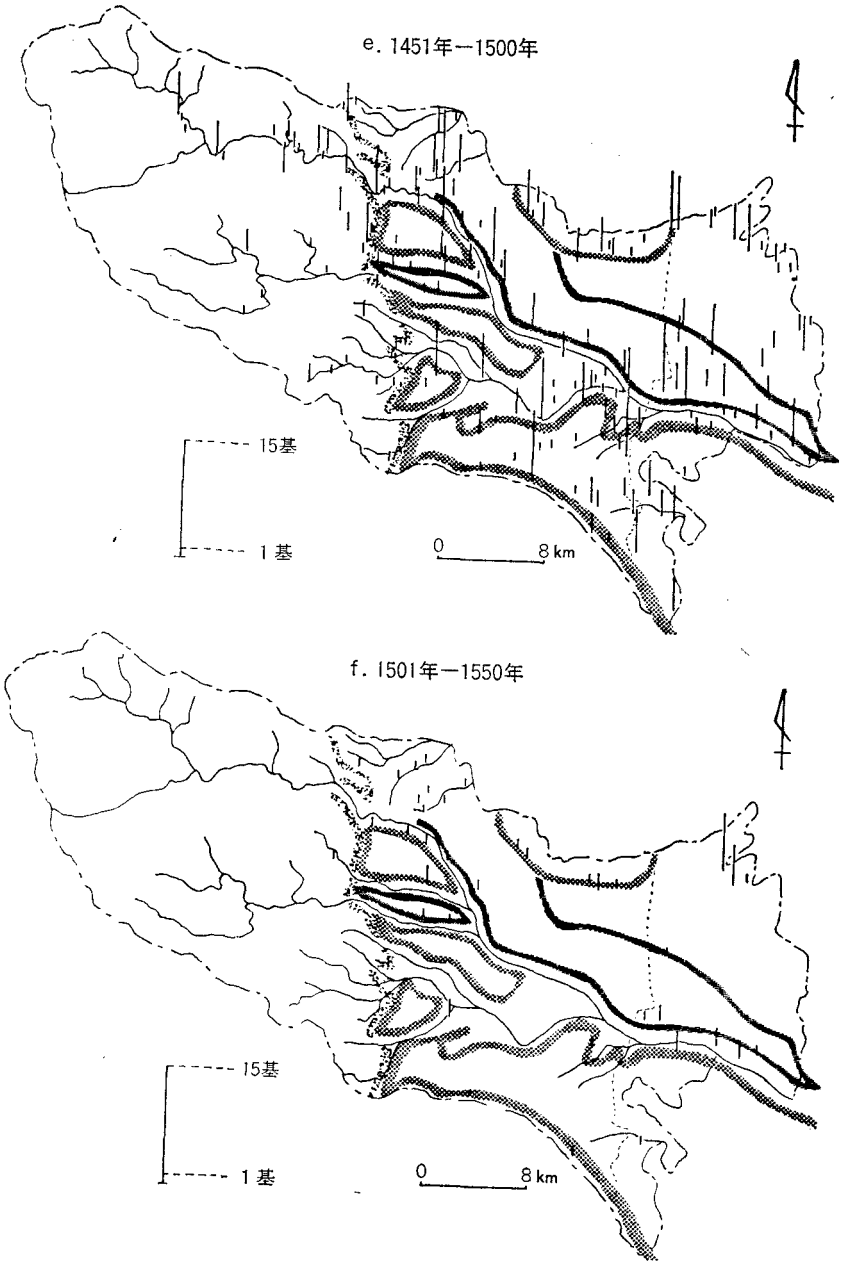

図1 e, f　三多摩における板碑分布

である。

・図1 b　(1301年—1350年)

この時期は図1 aの時期に比べ，約8倍以上の板碑が造立されている(表1)。分布としても，多摩川水系の上流部にまで広がりをみせている。最も多くの板碑が造立されているのは，立川市普済寺所在の板碑群である。この板碑群は，一括発掘された出土品で極めて保存状態がよいことなどから，江戸時代以前に埋没されていたと考えられている。さらに，臨済宗の普済寺が建立される時に，それ以前の浄土

宗系板碑（発掘された板碑群）を一括して埋没させたのではないかとも推論されている。[16]

・図１ｃ　(1351年―1400年)

この時期は，三多摩における板碑の最盛期といえる。分布から見ても，三多摩の中世村落の隅々にまで広がったといえよう。最も多いのは，東村山市徳蔵寺板碑保存館所蔵の板碑群である。徳蔵寺板碑保存館には，特に埼玉県比企郡の板碑が多く所蔵されている。当然，図中の板碑数は，他地域より収集した板碑を除外した。

・図１ｄ　(1401年―1450年)

分布の広がりは，図１ｃの最盛期と変わりない。しかし，図１ｂの立川普済寺の板碑，図１ｃの東村山徳蔵寺の板碑といった際立って板碑が多い地点は少なくなったために，青梅市周辺の板碑が多い点が注目される。

・図１ｅ　(1451年―1500年)

この時期になると，板碑の造立が集中的に見られる地域はなくなる。しかし，分布の広がりは，最盛期に劣らない。

・図１ｆ　(1501年―1550年)

この時期になると，多摩川上流部にまで広がっていた部分も，図１ａに似た分布状況となる。また，月待板碑といった民間信仰的板碑もいくつか造立されている。[17]

以上の六つの分布図を比較していくと，次の二つの伝播過程が想定できよう。

(1)入間川水系上流部から青梅を中心とした多摩川水系上流部への伝播過程には，狭山丘陵の麓をめぐる地域も含まれよう。

(2)立川市・府中市・多摩市を中心とした多摩川中流部より，主として鎌倉街道上ノ道[18]沿いへの伝播過程。図１ｂと図１ｃを比較すると，板碑は鎌倉街道上ノ道沿いに南下し，多摩丘陵を越えて境川沿いに伝播している。

この二つの伝播過程は，従来の三多摩への板碑運搬路についての推論とも符合する。(1)については，青梅市を中心にした斎藤慎一の次の指摘がある。

「古荒川乃至入間川を上流の石材産地より切りだされ，人力によるにたえぬ大きな石材は水運により，中流に出て各々支流を溯上し，また東京湾に出て，多摩川を溯行したのではあるまいか。[19]」

また(2)については，縣　敏夫の見解がある。これは，板碑の脚部に穴のあいているものがあることなどから，綱を通して引くか，または背負って運んだのではないかという見解によって，次のように指摘している。

「西多摩に至るには川越あたりまで荒川または槻川を舟や筏で運び，それよりは陸上を引いて運んだものと想像される。[20]」

このように斎藤慎一は，板碑運搬路としての河川の役割を強調しているが，縣　敏夫はむしろ陸上運搬を強調している。これは両者の研究対象地域が，青梅市と府中市という相違によるものかもしれない。

しかし三多摩全域を対象とした場合，板碑の大き

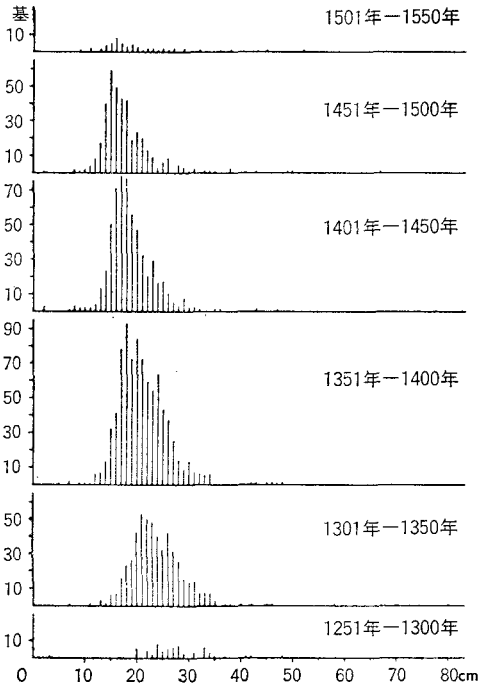

図２　年代別板碑横幅の変化

さに，地域的かたよりを見い出すことはできなかった。むしろ板碑の大きさは，図2のように，年代が下るにしたがって少しずつ小さくなる傾向がある。板碑は完型のまま残されているものは少なく，筆者がデータとした2,488基の板碑のうち，完型は561基を数えるにすぎない。しかし板碑の幅は原寸をよく残していることが，経験的に知られており[21]，図2は板碑の幅を示した。三多摩の板碑は，幅15cmから30cmの板碑が量的に多く，完型の板碑からその間の高さを求めると，平均50cmから1mとなる。原産地において板碑がすでに加工されたものとすれば，この程度の板碑は，河川よりも陸上運搬された可能性が強いように思われる。

おわりに

本研究では，三多摩を例に，50年単位で集計した板碑の分布図を作成することによって，板碑原石の伝播過程について考察を試みた。板碑には様々な様式があるが，そうした様式を本研究では一応無視して集計したため，概観的考察にとどまった。しかし，板碑の様式を考慮に入れて分布図を作成するならば，さらに細部にわたる考察も可能となろう。

筆者は，河川交通との関係において板碑を取り上げたが，本研究の段階では，むしろ陸上運搬によった可能性が強いことを示唆するにとどめたい。この点は，対象地域を多摩川下流，さらに荒川流域[22]へと広げていく必要があろう。また，板碑がどこで刻まれたか，石工の問題と関連させて究明しなければならないであろう。

（筑波大学大学院）

〔付記〕 東京大学史料編纂所所員千々和到氏に終始御指導いただき，また歴史学研究会中世史部会（昭和56年3月7日）にて本研究の中間報告をする機会を与えて下さったことに対して，厚く謝意を表します。

〔注〕

1）矢嶋仁吉『武蔵野の集落』古今書院，1954，65頁

2）北上市在住の伊藤二郎氏（明治27年生まれ）より聞き取り。

3）服部清道『板碑概説』（鳳鳴書院，1933）角川書店復刻，1972，105～106頁

4）縣　敏夫「多摩地方の板碑について(1)」（『多摩地方の板碑』多摩石仏の会，1980），1頁

5）『東京都板碑所在目録（多摩分）』東京都教育庁社会教育部文化課，1980

6）本稿で引用した報告書以外では，次の報告書を参照した。『府中市の石造遺物』府中市立郷土館，1980。『稲城市の石造物・続』稲城市教育委員会，1977

7）調布市浅田力造収集の板碑は，市内外より収集し原所在地不明のものが多く，郷土館等と同様の扱いをした。小川　信「調布市内の板碑」調布史談会誌8，1975，9頁

8）懸　敏夫「五日市の板碑」（『五日市町史』五日市町，1976），224頁

9）前掲7）参照

10）千々和到「東国における仏教の中世的展開(1)―板碑研究の序説として―」史学雑誌82―2，1973，18頁

11）千々和到「板碑と宗教史研究」考古学ジャーナル86，1973，23頁

12）渡辺美彦「板碑に刻まれた花瓶（けびょう）について」かながわ文化財76号，神奈川県文化財協会，1980，26～27頁

13）前掲10）19，23頁参照

14）前掲11）25頁参照

15）千々和実「板碑精査が実証する史上の驚異的重要現象―その保存・精査・教材化の急務」史誌8号，大田区史編纂委員会，1977，14～15頁

16）『立川市史 上巻』，立川市，1968，753―766頁参照

17）民間信仰的板碑への変化をどうとらえるかという点は，今後の課題としたい。

18）阿部正道「鎌倉街道について―その分布と遺跡―」（『人文地理学の諸問題』大明堂，1968），14頁

19）斎藤慎一『青梅市の板碑』青梅市教育委員会，1980，45頁

20) 縣　敏夫「板碑等よりみた羽村―西多摩の板碑と羽村―」(『羽村町史』羽村町，1974)，182頁
21) 前掲10) 11頁
22) 荒川流域については，下記の報告書が最近刊行された。埼玉県立歴史資料館編集『板碑』全3巻，埼玉県教育委員会，1981